

打つ こめる 焼く

里の仕事と山の仕事

おれ、もとほれ、加美郡のほうさ、大きな百姓家の手間取りに行っでやったから。なんぼ、十六あたりから行ったんだな、うん。ほごに居でほれ、兵隊さ行くまで居で、南方行たったから。炭焼するようになったのは、兵隊検査過ぎてからだおな。

ほのあたりほれ、親父とか、丈夫んだったから。ついで習ったんではねえけっとも、見てほれ。だから最初はやっぱり、ほのコツ分かんねえからさあ、木い立ててほれ、また上さ、こんど赤土を足で踏んで、そしてよく練って、ほしてほれ上げんだから。ほいつをほれ、こんど、叩（はだ）いて、固（かだ）めて。でも叩（はだ）けねえところは、暖（あった）けえくなってくっと、みな駄目になんだからさは。引込んだとごさ、何もしようがねえから、こいつは取って、また別な土上げて、また叩（はた）く。

里と山では、山の方がずうっと楽だったねや。やっぱり違うのね。百姓ってのは、暇がねえからおどけでねえ。楽な時もあっけっども、やっぱり毎日動（いご）いてねけねえから。なあに、山は炭焼ぐだって、窯あ、燻（いぶ）ってるうち、そいつあ、宛（あでげ）えば、あどあ休みにすっからさあ。あどほれ、窯閉（と）めてから、一週間とかなんぼ、すぐには炭出さねえから。その間はほれ、魚捕りだりなんだり、しでるわけしゃ。夏は魚捕り、冬は鉄砲撃ち。

とにかく木い伐って背負うのは難儀だけっども、あんまり百姓みてえに、ザァーッと、動（いご）かねえから。ああ、山の方あずうっといい。

（『升沢にくらす』 p.262）